



海老原誠治 (えびはら せいじ)

いただきます.info事務局、三信化工株式会社、資源と環境と教育を考える会「エコが見える学校」、女子栄養大学短期大学部非常勤講師、元関東学院大学非常勤講師。和食器を用いた出前授業や、テレビ局の撮影クルーの経験を生かして動画作成の研修会の講師も務める。

介入の倫理／クイズの面白さを再検証

▶ データ収集や論文の許可

昔であれば、許可を取らなくても研究や論文を書くのは自由であり、またデータ収集に関しても比較的小おらかでした。しかし近年は大きく変化しており、大学等に所属した場合、研究や論文に着手する前に、倫理委員会などの審査を受けます。問題なのは、研究をまとめ、論文やレポートの提出時に審査を受ければ良いと勘違いする人が多いことです。しかし、着手する前に審査を受けるのが大前提です。これは、個人情報保護や倫理・人権保護の視点で、近年では非常に強くルール化されています。

情報だけでなく、実験内容が倫理的であるかなどの審査を受けることにより、研究者も人権を考慮する良い機会となります。これを真摯に配慮しないといけないのは研究や論文だけではありません。アンケート収集は、名前や年齢、メールアドレスなど、複合することで非常にセンシティブな個人情報情報が安易に収集されてきましたが、社会全体で見直されているところです。また実験同様に、多くの介入行為に関して、人権の配慮が強く求められます。その最たるものがインフォームドコンセントなど説明義務や、同意書を必須とした医療介入でしょう。学校の健康診断もそうですが、職場の

健康診断・医療機関に通院した時ですら、医療側から見て治療や手術が必要と判断されても、決して勝手に手術されることはありません。この側面には、「個人の幸せは個人が決定するものである」という、人権の尊重が存在します。近年では、治療を受ける小児患者にわかりやすく説明して同意を得る「インフォームドアセント」なども提唱されています。

「個人の幸せとは、誰が決定するのか」など人権の保障や、理解のための説明、また同意等の手続きは、今後、栄養の介入にも求められるかもしれません。さまざまな倫理の議論と合わせ、今後も動向に注目したいと思います。

▶ クイズは面白いのか?

さて話は変わりますが、ずっと気になっているのはクイズに関してです。少なくとも江戸時代には、頓知を利かせたおしゃれな謎かけなどがあり、出題者との知恵比べなどを楽しんでいたようです。現在でも言うまでもなく、多く実施されます。

でもクイズは、本当に面白いものなのでしょうか? 例えば、こんなクイズだとどうでしょう。「筆者の隣の家の苗字は何でしょう?」「偶然、電車で隣に座った見知らぬ方の誕生日は何日でしょう?」「明日、スー

パーに来るお客の数は、偶数ですか？ 奇数ですか?」。また、ランダムな数字を選ぶロト6のくじに、賞金がなかったらどうでしょうか。賞品等の報酬もなしに、このようなクイズを何度も楽しめる人は少ないでしょう。きっとクイズが楽しい状態というのは、賞品・特典がある、もしくは褒められる、他人よりすごいと思われる、達成感がある、ラッキーなジンクスがある、自分に興味のある知識が増える、ゲーム性があるなど、何らかの利点や報酬がある時だと思います。

逆にこれが満たされないと、ただつまらない答え合わせになってしまいます。ですからクイズを実施するときには、必ず、子どもにとって面白い内容であるのかを想像します。しかし受験戦争の弊害でしょうか、単に知識を問うクイズが増えている気がします。知識が豊富な子どもだけが正解して楽しく、それ以外の子どもはあまり興味がないにも関わらず参加して不正解が続き、自信を少しずつ損なわせてしまっているのではないかと感じます。ですから安易なクイズは避け、クイズをする場合には、その設計に神経を使います。

①全員が納得し腹落ちするクイズ

1つの理想は、みんなが納得し、かつクイズに外れても不快に思う子どもを生まないことです。例えばですが、南蛮貿易を習った後の高学年に、金平糖がどこから伝わったかを質問するクイズです。



▲金平糖などがどこから伝わったかを出題。

②全員の予想を裏切る

逆に、誰もが何かしらの予想ができ、かつ誰もが答えを知らず、偶然や勘による正解しかない問題、「お茶碗1杯のご飯を作るときに必要な水はどのくらい?」。また、多くの予想を裏切る問題、「泥棒の風呂敷のぐるぐるの唐草文様、一体どこで生まれた文様かな?」など。



▲唐草文様はシルクロード経由で日本に伝わった。

③回答の多様性を認める

「ものすごく寒い時、自分の大切な人におもてなしをしたら、涼しいイメージの器か、暖かい色合いの器か、どちらを選ぶ?」。この場合、答えはどちらでも構わないと思います。ただ相手が暑がりやで冬が好きかもしれませんし、押しつけにならないように相手の気持ちを考えて選ぶ答えが、もてなしや思いやりかもしれないと説明します。



▲相手の気持ちを考えてもてなす際の器選び。

自分が興味がなくて知らないのに、出題者だけが答えを知っているとき、クイズは時には嫌味にもなります。また、知識で優劣を判定する試験にもなり得ます。誰もが楽しく感じるクイズに関しては、引き続き考えたいと思います。